

博士論文要旨

政治支配と排耶論

徳川前期における「耶蘇教」批判言説の政治的機能

パラモア キリ

徳川時代前期の排耶論 反キリシタン・反キリスト教言説 をめぐって、これまで多くの先行研究が、「外」の西洋思想たるキリシタンと、「内」の東洋思想たる伝統的日本思想の諸潮流との間での思想的衝突、という枠の内で議論してきた。キリシタン思想の弾圧もまた、これと同様な構図において研究されてきた。

しかし、歴史的事実という観点から見たとき、徳川前期の排耶論とキリシタン思想に関するこの描き方は妥当なものであったのか。キリシタン思想は、そのまま「外」のものであったのか。排耶論とは、そもそもキリシタン思想にのみ挑戦するものであったのか。

徳川時代前期の日本キリシタン思想の多くが日本人によって書かれ、日本人に読まれ、そして日本の都市において説教された、という歴史的事実を思い返してみると、果たしてそれは容易に「外」のものとして片付けられうる存在であったのだろうか、という疑問がまず浮かぶ。周知の通り、最も著名な日本キリシタン書を書いたハビアンは日本人であった。本論が検討したように、彼の思想には当時の地域環境（日本）の色濃い影響が見出される。

さらに、徳川前期の排耶論は、キリシタン思想への挑戦を真の目的としていたのか、という疑問もある。実際のところ、徳川前期の排耶論が絶頂期を迎えたのは、精力的なキリシタン弾圧

期（1613～1630年代）ではなく、むしろキリシタン思想の事実上の壊滅後（島原の乱後 1650～60年代）のことであった。

今まで「排耶論」と称されてきた言説の真の目的は、「キリシタン」の「排斥」ではなかったとすると、排耶論とはそもそも何であったのか。徳川前期の日本社会においてどのような機能を果たしていたのか。さらに、キリシタン思想と排耶論は具体的にはどのように関連していたのであろうか。本論では、徳川前期日本における言説空間に焦点を絞りつつ、これらの問いを主要な研究課題として検討した。

第一部では、現存する史料を通して、徳川前期排耶論の全体像と近世日本キリシタン思想に関連する唯一の事例であるハビアン思想について、改めて考察した。ハビアンは、自著『妙貞問答』（1605年）や京都での演説活動を通じ、いわゆるキリシタン思想史上最も影響力を持った日本人であった。しかし1608年頃、彼はイエズス会を脱会する。キリシタン弾圧開始後の1620年頃に『破提宇子』という著名な反キリシタン書を発表、反キリシタン運動にも自ら参加した。

第一部第一章では、『妙貞問答』を取り上げ、ハビアンの「人間観」が他のキリシタン思想とは異なった特殊な要素から形成されている、ということを示した。すなわち、縦社会的な支配構造を正当化する論理を内在化させていた当時の正統的日本キリシタン思想とは異なり、ハビアン思想には、普遍性や人間の自主性、その自立的行動を肯定する要素が強くあった。

第二章では、ハビアンとマテオ・リッチの思想を取り上げ、その比較考察を行った。その結果、詳細な内容（例えば形而上学上の構成等）において、両者の間に基本的な相違を確認した。他方、リッチ思想には、政治社会的な文脈において、上述のハビアン思想の特徴と類似した面があることも示した。それは特に、両者の思想に対するローマ教会からの最終的立場 否認に示されている。

第三章では、ハビアンの思想と藤原惺窩の思想を取り上げた。ここで、両者には、リッチの箇所を確認したのと同様な類似点があることを発見した。ハビアンと同様、惺窩は、儒学における人間の倫理的行動にかかわる教えを重視し、朱子学的形而上学を軽視する。惺窩の場合、その軽視は批判までは及ばず、「陽明学」に言及することで朱子学的形而上学を解釈するところに留まっている。興味深いことに、林羅山の惺窩に対する批判はまさにこの点に向けられている。

第四章では、従来の研究とは反対の視点から、『破提宇子』を検討した。すなわち、『破提宇子』をキリスト教の教理上『妙貞問答』に対する完全な反論と見なすことは正確ではない、と論じた。

『破提宇子』と『妙貞問答』との間で最も重大な対立点は「人心」の位置付けにある。つまり、

『破提字子』は、「人倫の品」を明らかにその内面には求めていない。むしろ、後世の多くの排耶論と同様に、主に「君臣夫子夫婦兄弟朋友」という確定された外在的人間関係における「職分」に見出している。

第二部では、17世紀の排耶論の形成を主な研究対象とした。

第二部第一章にて確認したように、先行研究の多くが徳川前期の排耶論をキリシタン禁止と関連付けながら議論してきた。しかし管見の限りでは、そうした研究が言及してきた著名な排耶書にも明らかなように、これらは全てキリシタン思想のほぼ壊滅された後に発行されていた。排耶論は、そもそも初めの段階からキリスト教そのものに対する宗教的な批判というよりは、むしろ政治的な次元において展開されていた、と指摘されうる。この点を、徳川前期の最も有名な四書 - 『破提字子』、『対治邪執論』、『吉利支丹物語』、『破吉利支丹』 - を通じて確認した。

第二章では、林羅山の「前期排耶論」とされてきた外交文書 1625年～40年代の間に政府関係者の代行として羅山が書いたものと、「後期排耶論」の一部とされる1650年代の石川丈山宛の書簡を検討した。この両資料の間にある相違点に注目することにより、特に1640年代後半～50年代前半の羅山思想における、(自らの思想的立場からの)「正統」と「非正統」の区分をめぐる体系化の様子が確認された。

第三章では、その思想が劇的な政治的文脈 慶安事変 の中で、どのように機能していたのかを検討した。従来、羅山の排耶論を通じた熊沢蕃山への攻撃が若干指摘されてきた。第三章では、この攻撃の体系的様子を明らかにした。具体的には、従来ほとんど研究されてこなかった『草賊前後記』の史料を研究し、羅山が如何に排耶論を利用していたのか、またその排耶論が心学や仏教などに対する彼の攻撃の言説と具体的にどのように関連していたのか、について解明した。

ここでは、羅山がこうした批判言説を利用しながら、蕃山や幕府の大奥で勢力を有していた祖心(祖心尼)に対する攻撃を展開させていたことを確認することができた。こうした史料分析を通じて明らかにしてきたのは、様々な思想的諸潮流を一枚岩的に「異学」とし、最終的には「耶蘇」という烙印を押す羅山のある種の思想の体系化のあり方である。「排耶論」や「廢仏論」、「心学批判」と称された羅山思想は、1650年代には「耶蘇」という看板を掲げながらある程度まで羅山自身によって体系化されていた。

「耶蘇」や「耶蘇の変」と羅山が呼ぶところの「非正統」的な思想傾向は、単純化してみると、来世での生活や個々人の心の内在する独立的な価値観を重視するといった特徴を備えていた。つまり、これらの思想は、現実社会における縦の人間関係以外の次元に忠誠心の対象が設定されて

いる。そのため危険視されたのであろう。

第四章では、従来の研究がしばしば注目してきた『排耶蘇』を取り上げた。この書は、ハビアンと羅山との討論を記録した1606年当時のものとされてきたが、実際のところ、そうでない可能性が十分あるということを確認した。詳細に検討して見れば、『排耶蘇』が両者の討論におけるハビアンの言葉を正確に記録したという可能性はほとんどない。むしろ本書は、第二章と第三章で確認したような1650年代の言説の中で作られたものである可能性が極めて強い、と考えられる。

以上、本論での議論を通じ大きな焦点となったのは、1)ハビアン思想をめぐって、その思想と正統的カトリック教理との相違、そして、2)林羅山の「異学」観に関するより体系的な全体像の提起、であった。

興味深いことに、この二点は、実は相互に緊密な関係にある。というのは、林羅山が、藤原惺窩や熊沢蕃山、祖心などの思想を批判する際の論理は、第一部で述べたように、正統的カトリック教思想の立場が、ハビアンとリッチの思想を否認したのと同じものであったからである。すなわち、藤原惺窩をはじめ、熊沢蕃山、祖心の思想は内面に基づいた自律的価値判断を重視していたが、この点こそ、羅山が彼らを批判する際に最も強調した点であった。つまり、価値判断を内面的領域に置き、結果として個々人の自律的価値判断を可能とする思想は、羅山にとって「脅威」以外のなにものでもなかったのである。この論理において、どの思想伝統(キリスト、儒学、仏教等)に属しているのか、あるいはその伝統の地理的な位置はどこであるのか(「西洋」か「東洋」)などの問題は、実は特段意味はなかったと考えられる。

この文脈において、徳川前期の排耶論は、キリスト教を直接批判するための言説でもなく、「東洋思想」あるいは「日本思想」が「西洋思想」に対して示した反応でもなかった。むしろ、この言説は、カトリック教においても適用された政治支配の言説であったといえよう。そして本論の結論はこの点に尽きるのである。